

日本の伝統音楽のよさを子どもに伝える資質を身に付けた学生の育成 ～「『雅楽』越天楽」の教材化を通して～

西村 敬子

Training Students who have Acquired the Qualities to Convey the Goodness of Traditional Japanese Music to Children — Through “Teaching Materials of “Gagaku” Etenraku Music” —

Keiko Nishimura

I 研究の基本的な考え

1 主題について

(1) 主題設定の理由

今日の社会は、情報化やグローバル化が急速に進展している。2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、スポーツへの関心を高めることはもちろん、様々な国や地域の文化の理解を通じて、多様性の尊重や異なる文化の中で生活する人々への共感や思いやりを培っていく機会になるであろう。今後、日本と世界との距離はさらに近くなっていくと考える。

このようにグローバル化が進む中、音楽科教育の役割の一つは、子どもの発達段階や実態に応じて、社会や時代の変化を超えた価値ある日本の伝統音楽のよさを認識し、尊重できる態度を身に付けた子どもを育てることである。

このことは、平成28年8月26日の中央教育審議会教育課程部会「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（案）」の「音楽，芸術（音楽）」の「ii）教育内容の改善・充実」の中でも資料1のように示されている。

このような背景・趣旨を鑑みると、日本の伝統音楽のよさを子どもたちに伝えるためには、まず、教師自身が、学習指導要領が示す「我が国の音楽」について知識をもち、指導する資質を高めていくことが重要である。

本学において、音楽科教育法を学んでいる学生に「音楽の授業について不安に感じていること」の意識調査を実施した結果を資料1に示した。66%の学生が「不安」「どちらかといえば不安」と答えている。不安に感じている理由は「授業の展開」「教材分析」への不安や「学習指導要領の理解」等で、知

資料1 教育課程部会 教育課程企画特別部会の資料「音楽，芸術（音楽）」の「ii）教育内容の改善・充実」¹⁾

ii）教育内容の改善・充実

○ グローバル化する社会の中で、子供たちには、芸術を学ぶことを通じて感性等を育み、日本文化を理解して継承したり、異文化を理解し多様な人々と協働したりできるようにすることが求められている。このため、音楽の伝統や文化を尊重し、実感的な理解を深めていくことが重要である。

○（略）

○ 子供たちが置かれている生活環境がこれまでと大きく変わってきている。こうした環境の変化を踏まえて、例えば、我が国のよき音楽文化を伝える教材を扱ったり、実際にものに触れて感じ取ることや体を使って体験する活動を重視したり、（略）学校教育において取り上げなければ出会うことのない教材や経験することのない活動を、子供たちに提供することも、学校教育の役割の一つである。

（略）

識不足、実践経験が無いことなどに起因しているようだ。指導する分野については、日本の伝統音楽に対する指導に最も不安を感じていることがわかる。学生自身が日本の伝統音楽に対する理解を深め、児童を指導する力量を高めることが喫緊の課題である。

以上のことから、児童に日本の伝統音楽のよさを味わわせる意義を踏まえ、それを指導する立場に立

図1 音楽を教えることに不安はあるか

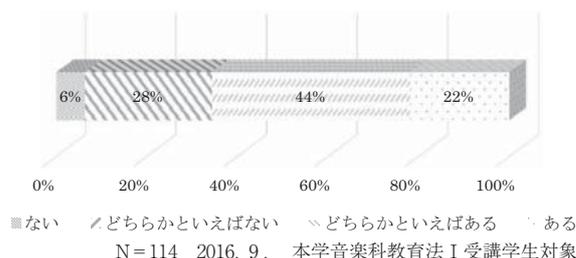
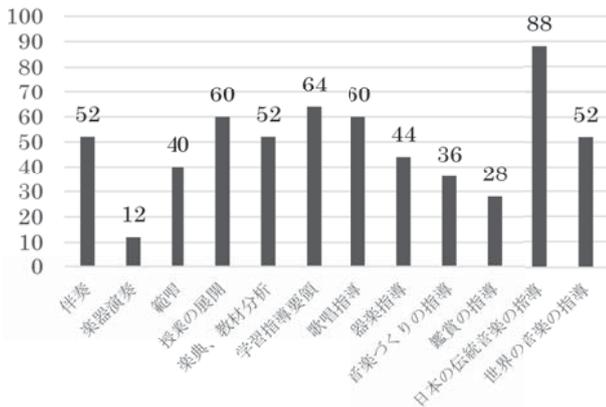


図2 音楽の授業をするときに不安なこと（複数回答）



N=114 2016.9. 本学音楽科教育法Ⅰ受講生対象

つであろう学生が日本の伝統音楽を子どもたちに指導する際に必要になる力を「教材化」を通して明らかにしていくことをねらい本研究に取り組んだ。

2 主題、副主題の意味

(1) 「日本の伝統音楽」とは

「日本の伝統音楽」とは、雅楽、仏教音楽、箏曲などの器楽曲、民謡、吟詠、祭礼音楽など古くから伝えられている音楽全般ととらえる。

小学校の学習指導要領解説音楽編では、教材例として、和楽器の音楽を含めた我が国の音楽や諸外国の音楽など文化とのかかわりを感じ取りやすい音楽、人々に長く親しまれている音楽とされ、具体的には、我が国の音楽の特徴を感じ取りやすい和楽器による音楽、雅楽、歌舞伎、狂言、文楽の一場面などを含めた多くの人々に親しまれて伝えられている音楽などが示されている。本研究では、古くから伝承されている日本の音楽を総称して「日本の伝統音楽」として扱うこととする。

(2) 「日本の伝統音楽のよさを味わう子ども」とは

「日本の伝統音楽のよさを味わう子ども」とは、日本の伝統音楽の構成要素を知覚・感受して、よさやおもしろさを味わい、そのよさやおもしろさを他者に伝えることができる子どものことである。

(3) 「日本の伝統音楽のよさを味わう子どもを育てる資質」について

指導者自身が日本の伝統音楽のよさをとらえるとともに、そのよさを子どもに伝えるために必要な手順・方法を理解し、実践する態度ととらえる。

(4) 「『雅楽』越天楽の教材化」について

音楽科の学習指導においては、題材「日本の伝統音楽に親しもう」などの主題による題材構成で学習を進めることが一般的であるが、本研究では、題材で取り扱う教材曲の一つとして「『雅楽』越天楽」

を設定し、目標や指導する内容、指導する順序等を考え、学習指導を構想することにした。

教師自身が日本の伝統音楽が苦手であっても、子どもたちに日本の伝統音楽のよさを指導し伝えていかなければならない。日本の伝統音楽のよさやおもしろさを味わわせるため、指導内容、指導方法などを明確にし、どのように進めたらよいか授業を構想する手順を明らかにする。

3 研究の目標

日本の伝統音楽の教材化を通して、我が国の音楽のよさを子どもに伝える資質を身に付けた学生を育成する方途を分析・実践する。

4 研究の仮説

日本の伝統音楽の教材化の手順を明らかにすれば、我が国の音楽のよさを子どもに伝える資質を身に付けた学生を育成することができるであろう。

5 研究の内容

- (1) 教材化する日本の伝統音楽のよさを明らかにする。
- (2) 日本の伝統音楽を教材化する手順を明らかにし、「『雅楽』越天楽」を教材化する。

Ⅱ 研究の実際

1 日本の伝統音楽のよさ

小泉文夫は「日本の音」（青土社発行）の中で、日本の音楽理論については西洋の理論を参考にしつつも独自の性格を解明する理論であるべきだと考え、音素材、音、噪音、音階、無拍のリズム、音の長さ、メリスマ、余韻の変化、序破急などに特徴があると述べている²⁾。これらは近代西洋音楽にはない独特な特徴である。今回はこれらを基本に日本の伝統音楽のよさを考えていく。

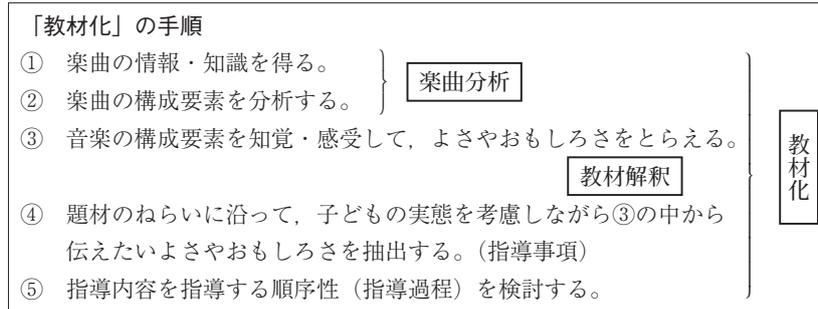
2 教材化の手順

教師が、音楽の構成要素を知覚・感受し、題材のねらいに沿って指導事項を抽出し、それらをどの順番にどのような方法で児童に学習させていくとよいのかを検討していく。その手順を示したものが資料2である。

(1) 楽曲についての情報・知識を得る。

楽曲が作られた背景、作曲者に関するもののほか、音楽の構成要素（リズム、旋律、拍子、調、形式、音色、歌詞、唱法・奏法、強さ、速さ等）の大体について調べる。

資料2 教材化の手順



(2) 楽曲の構成要素を分析する

楽譜や音を通して楽曲を分析する作業である。森協憲三は著書「専門的指導の内容と方法」の中で、音楽の味わい・美しさは、文学的要素(歌詞等)、構成的要素(調、拍子等)、美的要素(速さ、強さ、音色、和声、形式)、演奏的要素(奏法、唱法、演奏形態)で作りに出されていると述べている³⁾。小泉文夫が述べた日本の伝統音楽の特徴として音素材、音、噪音、音階、無拍のリズム、音の長さ、メリスマ、余韻の変化、序破急、などの要素も含めて分析していくこととする。

(3) 音楽の構成要素を知覚・感受して、よさやおもしろさをとらえる。

ここでは、楽曲を何度も聴き味わい、構成要素を知覚し、よさやおもしろさを感じることが求められる。CD等で音楽を聴くだけでなく、「生の音楽に触れる」「本物の楽器を観る」などの直接体験や「本物の演奏に近づくように真似る」などの疑似体験を取り入れると、日本の伝統音楽のよさやおもしろさをより実感を伴って理解できる。さらに、知覚・感受したことを学生間で交流し協同的に考えていくことを通して、自分の知覚・感受を確かなものにしていく。

(4) 題材のねらいに沿って、児童の実態を考慮しながら p.47資料2「教材化の手順」③の中から伝えたいよさやおもしろさを抽出する。

指導者の知覚・感受した内容と児童が知覚・感受する内容では実際に違いがある。指導者が感じ取ったよさやおもしろさを全て児童に伝えることはできない。題材のねらいに沿って、児童の実態を考慮しながら、どんな構成要素を知覚・感受したらどんなよさやおもしろさをとらえさせることができるかを吟味していく。指導者は児童がどのような言語を使って知覚・感受したことを表現するかあらかじめ予測しておくことが必要である。また、知覚しながら感受し、感受しながら知覚するというように進むため、知覚・感受する内容は順序性を表すものでは

ない。ここで抽出した内容が学習における指導事項になっていく。

(5) 指導する順序性、方法を検討する。

児童に指導したいよさやおもしろさが決定したら、それらを指導する順番、指導する手だてを検討する。児童の学習への意識が連続し、思考が深まるように、指導する順序性を吟味していく。音源はCDを用いるのか、映像も使うのか、また本物の音にふれさせるのか、学習形態は一斉学習なのか、グループ学習なのか、大まかな児童の活動や活動に対する指導者の支援を考えておく。この、順序性が学習の指導過程につながっていく。

3 『雅楽』越天楽の教材化の実際

『雅楽』越天楽を使って、教材化の実際を述べる。

(1) 『雅楽』越天楽についての情報・知識を得る。…①の段階 (p.47資料2「教材化の手順」参照)

『雅楽』越天楽は、神社などでよく流れており、比較的よく耳にする雅楽である。この旋律に歌詞がつけられたものが「越天楽今様」であり小学校の学習指導要領で6学年の歌唱共通教材に取り上げられている。

学修のレディネスとして、学生には事前に多様なツールを活用して『雅楽』越天楽に関する情報収集をするように指示し、音楽科教育法の授業に臨ませた。学生の多くは「神社で流れている曲」という程度の認識で、若干名の学生は小学校や中学校の音楽の授業で学んでいたものの、雅楽の歴史や演奏の仕組みや雅楽器の種類などは、印象に残っていない学生も多かった。

次に示していることは、レディネスとして全体で確認した情報である。

資料3 学生に与えた『雅楽』越天楽に関する知識

雅楽は中国の唐の時代に日本に伝わったとされている。国が公的な音楽としてとり入れた雅楽は、宮廷と格式の高い神社仏閣の中だけで伝えられてきたために、一般の人々が雅楽に触れることはほとんどなかった。それ故に、渡来以来1300年を経たにもかかわらず、原型に近い姿で今日に伝えられている。雅楽は「管絃（楽器だけによる合奏形式の雅楽）」「舞楽（合奏に舞を伴う形式の雅楽）」「歌曲（催馬楽・朗詠などの平安時代に作られた歌曲）」などの種類がある。小学校の教材に取り扱われているのは管弦である。

雅楽は、管楽器、打楽器、弦楽器の楽器が揃った合奏である点から。西洋のオーケストラと似ているとも言える。

吹物（管楽器）…箏、篳篥、竈、笙
打物（打楽器）…楽太鼓、鞆鼓、鉦鼓
弾物（弦楽器）…琵琶、楽箏

〔島崎篤子・加藤富美子 「授業のための日本の音楽・世界の音楽」 参考〕

(2) 「『雅楽』越天楽」の構成要素を分析し、知覚・感受してよさやおもしろさを感じ取る…②③④の段階 (p. 47資料2「教材化の手順」参照)

最初、学生に「『雅楽』越天楽」の特徴をとらえさせるために、CDの音源を聴かせた。「教科書に載っている音楽とは違う不思議な響きがある」と感想を述べ、全体の曲想を大まかにとらえることがで

きた。次に、より深く知覚・感受させるため、DVDを視聴させた。視覚的な映像からは雅楽を演奏する奏者の服装や場所などの具体的な情報を得ることができ、自分たちが事前に得た情報と照合し確認していた。さらに、雅楽の構造や奏法に目を向けた学生は楽器の音色を注意深く聴き取っていた。

2度目のDVDの視聴では、全体に「鑑賞しながら拍打ちをしよう」「指揮をしてみよう」と投げかけDVDに合わせて拍を打ったところ、学生は「拍打ちが合わない」「拍が明確でない」と雅楽の拍のずれを感じ取っていた。

3度目のDVDの視聴では、楽器の構造を理解するとともに、奏法に着目しながら楽器の音色を視点にして雅楽の特徴をとらえていった。例えば、箏は草笛と同じで二枚のリードがふるえて音が出るため音程が不安定であることや、笙は17本の竹管にリードがついているため様々な音が出せる。学生は笙が奏でる西洋音楽にはない不協和音の響きを聴き取り、雅楽の神秘的な世界を感じていた。

さらに鞆鼓の奏法に着目し、片手で打つ片来や両手で打つ諸来もろらいの奏法を真似て、加速度的なリズムの特徴をとらえた。

終末では「『雅楽』越天楽」を身近な楽器で演奏

表1 「『雅楽』越天楽」から知覚・感受できる内容

	楽器	役割	つくり	特徴
管楽器	ひかりき 箏	主旋律を演奏する	リードをもち、草笛のような音色	楽器の大きさとは反対に音量はとても豊かで、力強い音色「地上にこだまする人の声」
	りゅうてき 竈	主旋律を演奏する 飾りの旋律を演奏する	横笛 フルートに似ている 息の使い方によって同じ指孔で1オクターブという広い音域を出すことができ、装飾的な旋律を奏でる	「天と地の間、空を翔ける龍の鳴き声」
	しょう 笙	和音を演奏する	17本の竹管にリードがついているので複数の音が出る。吹いても吸っても音が出る。	「天から差し込む光」と称される。パイプオルガンが静かに鳴っている感じ
打楽器	かっこ 鞆鼓	一定のリズムパターンを演奏し、全体の速さを決め、終わりの合図を出す	鼓の一種で、木製の台の上に奏者の正面に横向きに置き、二本の桴を使って左右両面を打つ	よく響く高い音
	かくたいこ 楽太鼓	リズムパターンの区切りを示す	楽太鼓とは雅楽で使われる平太鼓を円形の桴に吊るした太鼓 先端に革を巻いた二本の桴で力強く革面を打つ	演奏に重厚さをそえる音
	しょうこ 鉦鼓	リズムパターンの区切りを示す	金属製の皿型を架台に吊るし、玉や牙、水牛の角などの固い素材で作られた二本の桴で凹面を打って鳴らす楽器	全体を引き締める高い金属音
弦楽器	かくびわ 楽琵琶	一定の音型を演奏し拍を示す アルペジオで奏される	4本の弦をもつ	低い音
	かくそう 楽箏	一定の音型を演奏し小説の中ではリズムの流れを奏する	13本の弦をもつ	低い音 落ち着いた音色

する合奏を試みた。学生に「『雅楽』越天楽」を演奏している雅楽器を身近な楽器で代替すると何の楽器を使うか考えを交流させ決定した後、鳥崎篤子・加藤富美子著「授業のための日本の音楽・世界の音楽」に掲載されている「平調越天楽（合奏用）」の楽譜⁵⁾を用いて合奏に取り組んだ。同じパート内の音程のずれや、ほかのパートとの拍のずれなどを実際に体験することで、ずれることが雅楽のよさやおもしろさだと体感することができたようだ。授業の最後にまとめとしてDVDを視聴したところ、「自分が受け持った箏の旋律を聴きながら越天楽を聴いていた。全体の中では箏の音が強く響き優雅な感じをかもし出していることが分かった。」と感想を述べる学生も見られ、音楽の構成要素を知覚・感受し、よさやおもしろさを味わっている姿だととらえた。

p.48表1は音楽之友社発行「教育音楽（中学・高校版）」2014年8月号⁴⁾の資料を参考に「『雅楽』越天楽」の構成要素を知覚・感受することで感じるよさやおもしろさに通じる特徴をまとめたものである。

- (3) ねらいに沿って、児童に伝えたい「『雅楽』越天楽」の「よさやおもしろさ」を抽出し、指導する順序性、方法を吟味する。…⑤の段階（p.47 資料2「教材化の手順」参照）

題材のねらいに沿って、児童の実態を考慮しながら、どんな構成要素を知覚・感受したらどんなよさやおもしろさをとらえさせることができるかを吟味していくように指導した。p.49資料4は学生が知覚・感受した「『雅楽』越天楽」のよさやおもしろさである。

次に、ねらいに沿って児童にどの要素を知覚・感受させるとよいかを吟味する。ねらいを、「『雅楽器の音色』『演奏の仕方』『速度』に着目し、雅楽のよさやおもしろさをとらえさせる」と想定し、アからソまでの項目のどれを教えるとねらいが達成できるかを吟味した。p.49資料5は、学生が抽出した児童に伝えたいと考えた「『雅楽』越天楽」のよさやおもしろさを示したものである。

さらに、抽出したよさやおもしろさを児童に伝えるときの順番を検討した。資料6は、学生が考えた指導の順番である。学生は、雅楽器については全部の楽器について、名前、構造や音色を映像で理解させたいと考え、3番目の学習活動に位置付けた。ここで考えた指導の順番をもとに、学習指導案の指導過程をつくっていくことになる。

資料4 学生が知覚・感受した「『雅楽』越天楽」のよさやおもしろさ

【学生が知覚・感受した「『雅楽』越天楽」のよさ・おもしろさ】

〔雅楽器について〕

- ア 箏の音色は、草笛みたいで音程が一定でなく、途中で音が膨らむように聞こえたところがおもしろい。
 - イ 竜笛はフルートに似ていて細かな動きを表現できるので装飾的なふしを奏でる。
 - ウ 竜笛は音域が広く、箏のオクターブ上を演奏しているので空の高いところで響き感じがする。
 - エ 笙は17本の竹管からなっている。それぞれにリードがあり、西洋音楽と違った不協和音の独特な響きがある。
 - オ 笙は吹いても吸っても音が出るので和音が途切れず奏でられていて、雅楽が途切れなく流れる感じが醸し出される。
 - カ 楽箏、楽琵琶は低い音がして響く。
 - キ 楽太鼓の体に響く大きな音が全体を引き締めている。
 - ク 鞆鼓がだんだん速く打っていておもしろい。鞆鼓が指揮者の役割をしている。
 - ケ 鉦鼓は、金属音で固い音色だ。フレーズの区切りを示している。
- 〔雅楽について〕
- コ 楽琵琶は低い音がする。1拍目をアルペジオで演奏しており楽器間の拍がずれていることがわかる。
 - サ 楽箏は楽琵琶よりもゆるやかなアルペジオの動きで拍を示す。
 - シ 演奏者がそれぞれ呼吸を合わせている。各楽器の拍がずれているところおもしろい。
 - ス ゆっくりと演奏されるので、拍をとらえにくいように、拍がずれて、フレーズの間に「間」があることが特徴である。
 - セ 譜面の演奏は演奏者に任せられているところが大きい。
 - ソ 自分たちで「越天楽」を演奏してみると、雅楽の響きが表現できておもしろい。

資料5 学生が児童に伝えたいと考えた「『雅楽』越天楽」のよさやおもしろさ

- 雅楽器の音色、構造、奏法による曲想のおもしろさ
 - ア 箏は草笛みたいで音量と音程の変化によって音が膨らんだりしぼんだりして聞こえること
 - イ 竜笛はフルートに似ていて細かな動きを表現していること。
 - エ 笙は17本の竹管からなっている。それぞれにリードがあり、西洋音楽と違った不協和音の独特な響きがあること
 - オ 笙は吹いても吸っても音が出るので和音が途切れず奏でられていて、雅楽が途切れなく流れる感じが醸し出されること
 - キ 楽太鼓の体に響く大きな音が全体を引き締めていること
 - ク 鞆鼓のだんだん速く打つ奏法のおもしろさ
- シ 各楽器の拍がずれているおもしろさ
- ス ゆっくりと演奏されるので、拍をとらえにくいように、拍がずれて、フレーズの間に「間」があること
- ソ 身近な楽器で「越天楽」を演奏したことで感じ取った雅楽の響きや、ずれなどのよさ

資料6 学生が考えた『雅楽』越天楽』のよさやおもしろさを指導する順番及び方法

【学生が考えた『雅楽』越天楽』のよさやおもしろさを指導する順番及び方法】

- 1 シ 各楽器の拍がずれているよさを味わう。…音楽に合わせて拍打ちをすることで拍のずれをつかませる。
- 2 ス ゆっくりと演奏されるので、拍をとらえにくいように、拍がずれて、フレーズの間に「間」があることを味わう。…音楽に合わせて拍打ちをすることで拍のずれをつかませる。
- 3 雅楽器の音色の特徴を味わう。…DVDで視聴、できれば本物の楽器を提示する。
 - ア 箏は草笛みたいで音程が一定でない。
 - イ 篳篥はフルートに似ていて高い音が出る。
 - エ 笙は17本の竹管からなっている。それぞれにリードがあり、西洋音楽と違った不協和音の独特な響きがある。
 - オ 笙は吹いても吸っても音が出るので和音が途切れず奏でられていて、雅楽が途切れなく流れる感じが醸し出される。
 - キ 楽太鼓の体に響く大きな音が全体を引き締めている。
 - ク 鞆鼓が指揮者の役割をしている。
- 4 ソ 雅楽器を身近な楽器で代替して、「越天楽」を合奏し雅楽のよさを味わう。…身近な楽器のつくりや音色と雅楽器を比較させ合奏に使う楽器を決定し合奏させる。

(4) 学生の『雅楽』越天楽』の学修

上記に述べた『雅楽』越天楽』の教材化について、音楽科教育法Ⅰ（全15時間中の6時目）で取り上げた授業の流れをまとめたものが資料7である。

4 「雅楽越天楽」の教材化の考察

日本の伝統音楽を指導する時に、① 楽曲の情報・知識を得る。② 楽曲の構成要素を分析する。③ 音楽の構成要素を知覚・感受して、よさやおもしろさをとらえる。④ 子どもの実態を考慮して③の中から伝えたいよさやおもしろさ（指導内容）を決定する。⑤ 指導内容を指導する順番（指導過程）を決定する。という手順で教材化を進めた。

事前にレディネスとして『雅楽』越天楽』について情報を収集するように指示しておいたことで、学生は様々なツールを使い『雅楽』越天楽』にふれて授業に臨んでいた。しかし、情報収集に関しては量的質的にも差があったので、グループ内で情報を交流して誰も必要な知識を得ることができるようにした。

資料8、9は、授業後の学生の感想である。学生にとっては楽曲の構成要素を分析する際、リズム、旋律、音色などの音楽の構成要素を理解することが難しかったようだ。シラバスでは、この次の授業で教材解釈を取り上げる予定であり構成要素の理解がまだできていないためと思われる。今回は一斉指導で雅楽器一つ一つの構造と奏

資料7 『雅楽』越天楽』の学修の流れ

	学修活動と内容	教師の働きかけ	学生の反応
教材化 ① 楽曲の情報・知識を得る	1 『雅楽』越天楽』を聴く。 (1) 『雅楽』越天楽』を聴いた感想を述べる。	鑑賞後に感想を聴くことを告げ聴かせる。	「神社で聴く音楽」 「日本的」 「癒される」等
	2 雅楽器への理解を図り雅楽の特徴をとらえる。 (1) 『雅楽』越天楽』で知っていることをグループで交流する。 ・雅楽の歴史 ・雅楽の種類 ・雅楽器の種類 ・演奏する場所 等	○事前に収集した情報を出し合うよう指示する。 ○年表を使って雅楽が伝わった時代、1300年の間伝えられている音楽であることを知らせる。	○調べたことをグループで出し合う。 「雅楽は古い」 「演奏は昔のままなのか」 「神社で演奏される音楽」 「管絃の他にも舞楽もある」
よさ・おもしろさをとらえる ② ③	(2) 雅楽器について知り、雅楽の特徴をつかむ。 ・拍が一定ではなく、楽器によって出だしがそろっていないこと ・音程が一定ではないこと ・雅楽器の音色 ・鞆鼓のリズムは打ち方が一定ではないこと ・笙は音が途切れにくいこと ・笙は不協和音が響くこと	○「指揮をしている楽器はどれだろう」と投げかけ、DVDをもとに式の役割をしている楽器を予測させる。 ○DVDを鑑賞し、「拍をとりながら越天楽を聴いてみよう。」と投げかけ、雅楽の特徴をつかませる。	○DVDに合わせて手拍子で拍をとるがなかなか合わない。 「打楽器ではないか」

<p>⑤ 指導する順序性を検討する</p> <p>④ よさ・おもしろさを抽出する</p>	<p>③ 3 雅楽越天楽を身近な楽器を使って演奏する。</p> <p>4 グループごとに、ねらいを達成するために児童に伝えたい「『雅楽』越天楽」のよさを抽出し、指導する順番を吟味する。</p>	<p>○「指揮者の役目はどの楽器が担っているだろう」と投げかけ、雅楽の特徴をつかませる。</p> <p>○「今でいうと…なぜなら…」という形で発言させる。</p> <p>○楽器について説明する。 「オーケストラに当てはめると何の楽器が代替するか考えよう」と投げかける。</p> <p>○身近な楽器で「雅楽越天楽を演奏しよう」と投げかけ、代替する楽器を決定させる。</p> <p>○個別に練習する時間をとる。</p> <p>○「拍のずれ」「不協和音」などを感じるとともに、呼吸を合わせることを意識して演奏することを助言する。</p> <p>○今回の授業は大学生対象の流れであり、小学生にはどの順番で、どのような方法で雅楽のよさを伝えるかグループで話し合わせる。</p>	<p>「楽太鼓は太太鼓のような音がする。構造が似ているからだ。」 「竜笛はフルートのように音がするなぜなら、楽器の構造が似ている。」等</p> <p>○身近な楽器や器楽室のオルガンの音色機能から音色を選んでいる。</p> <p>○「むずかしい」と感想を述べる学生もいるが、二回目の演奏では、楽譜が理解できていたようだ。</p> <p>○自分は音を間違えたり、出だしが合わなかったりしたけど雅楽の特徴である「音程の違い」「ずれ」もよさを表現できたかなと考えている。</p> <p>「本物の楽器に触れさせたい。」 「合奏は楽しかったのでぜひ取り入れたい。」 「楽器一つ一つの特徴をつかませたい。」 「雅楽を他の場面でも聴かせたい。」</p>
--	--	---	--

法と音色を結び付けて、音楽の構成要素を知覚・感受させ、それらが生み出すよさやおもしろさを確認していった。今後、「教材解釈」の位置付けを検討するシラバスの改善が課題である。

資料8の学生の感想①②③から、「『雅楽』越天楽」の構成要素を知覚・感受する際、雅楽を身近な楽器で表現するという疑似体験を取り入れたことは、「ずれ」や「音程の不安定さ」など日本の伝統音楽の特徴を感じ取るうえで効果的であったと考える。疑似体験の合奏を通して「『雅楽』越天楽」のよさを感じ取った学生は多かった。

学生は自分が指導者になったとき、「『雅楽』越天楽」をどのように指導すべきか、その手順を「教材化」という観点から学んだ。学生の感想⑤にあるように「手順が少しわかった気がする」という学生の感想が多く見られたことは成果である。学生の感想④⑤から、学生自身が雅楽のよさやおもしろさを感じ取るとともに、児童によさやおもしろさを伝えるという指導者としての役割を感

じているととらえる。また、学生の感想⑤⑥は、学生が日本の伝統音楽のよさをとらえるとともに、そのよさを子どもに伝えるために必要な手順・方法に気付き、実践しようとする態度の表われととらえる。一歩ずつであるが、「『雅楽』越天楽」の教材化の手順を他の日本の伝統

資料8 学生の感想 ① ② ③

〔学生の感想①〕
私は箏の旋律をリコーダーで演奏しました。音をふくらませたりしぼめたりしながら音程を変えて吹くために、タンギングをしないで演奏しました。

〔学生の感想②〕
拍がないのにあれほどあっているのに驚きました。「ずれていることがいい」「ずれの美学！」と初めて感じました。日本の伝統音楽は奥が深いと思いました。

〔学生の感想③〕
身近な楽器で越天楽を演奏したのは楽しかった。雅楽を最初に聴いたときと自分が担当する楽器を演奏した後では、音の聞こえ方が変わってくるのが分かった。

資料9 学生の感想 ④ ⑤ ⑥

〔学生の感想④〕

グローバル化が進んでいく中、一人一人が自国について知ることが大切だと実感した。日本の音楽のよさを子どもたちに伝えるのも大切な教師の役割だと感じた。

〔学生の感想⑤〕

雅楽ってゆったりしていて嫌だなあと思っていたのですが、聴いて演奏してみると、型にはまらない日本の音楽も楽しいものだなあと思いました。子どもたちにも本物の雅楽を鑑賞させたいと思いました。日本の伝統音楽の指導の手順が少しわかった気がします。

〔学生の感想⑥〕

小学校の授業で今の児童はポップな曲を聞くことが多いので、日本の音楽も触れさせる機会を教師が作る必要があります。私は、和太鼓の音楽にも興味があります。ぜひ、子どもたちに授業をして和太鼓の音楽のよさを伝えたいと思います。

音楽の指導にも当てはめ、指導しようとする態度が育っていると考える。

今回、90分の授業の中で箏曲「春の海」も扱ったことから、「『雅楽』越天楽」を教材化するにあたり「⑤ 指導内容を指導する順番（指導過程）を決定する。」時間が十分に取れなかった。⑤で考えた順番が学習指導案を作成する指導過程につながっていくことから、音楽科教育法Ⅱで実際の授業を仮定した模擬授業の場面で、さらに教材化の内容を深めていきたい。

教材化の手法を理解していれば、他の日本の伝統音楽の楽曲を指導する場面や諸外国の音楽を指導する場面でも応用し当てはめて授業することができると考える。本学の音楽科教育法では、資料10のシラバスで授業を行っているが、前にも述べたように「教材解釈」の授業の位置付けを工夫し、シラバスを改善したい。

資料10 本学における2016年度の日本の伝統音楽に関する指導の流れ

講義	内容
音楽科教育法Ⅰ 1/15時間 6時間目 「我が国の音楽」	我が国の音楽についての概要を知り、指導の実際を学ぶ。
音楽科教育法Ⅰ 2/15時間 7, 8時間目 「教材解釈の実際」	グループ毎に我が国の音楽や郷土の音楽からも教材曲を選択し、教材研究をする。自分たちで「教材化」した内容を発表する。
音楽科教育法Ⅱ	グループごと自分たちで「教材化」した内容をもとに学習指導案を作成し模擬授業を実施する。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

授業終了後、学生に、「『雅楽』越天楽」の授業に取り組んでみたいかと尋ねた結果が図3である。「したい」「どちらかと言えばしたい」と答えた学生が、90%に上った。また、日本の伝統音楽の進め方がおおよそわかったかと尋ねた結果が図4である。「おおよそわかった」「どちらかといえばわかった」と答えた学生が65%であった。自分一人で「教材化」に取り組むことに不安があると感想を書いている学生もいたことから、学校現場では組織的に協働して「教材化」の作業を進めることが重要になってくるだろう。

図3 「『雅楽』越天楽」の授業に取り組んでみたいですか

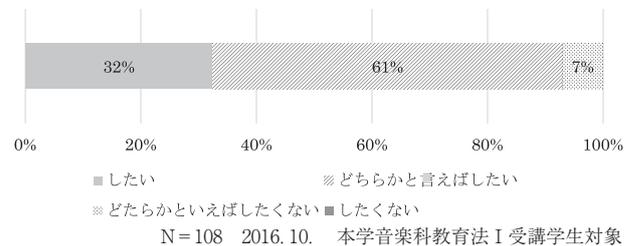
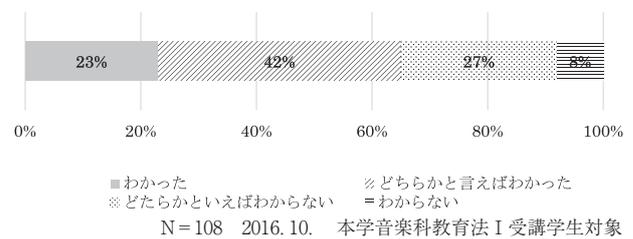


図4 日本の伝統音楽の学習の進め方がおおよそわかりましたか



- 日本の伝統音楽のよさを子どもに伝える資質とは、指導者自身が日本の伝統音楽のよさ・おもしろさを感じ取るとともに、子どもにそのよさ・おもしろさを伝えるため楽曲を教材化する手順・方法を理解することである。
- 児童に日本の伝統音楽のよさを伝える授業をする際、「教材化」という視点から授業を構想するとよいことを学生に理解させることができた。
- 日本の伝統音楽の「教材化」の手順・方法が明確になった。
- 日本の伝統音楽のみならず、日本の伝統音楽を「教材化」した手順を他の日本の伝統音楽の指導や世界の音楽の指導にも当てはめて児童に指導してみたいという学生が増えた。

2 今後の課題

- 「教材化」する活動を充実させるためのシラバスの改善

- 直接体験，疑似体験を取り入れた学修の工夫

引用文献

- 1) 文部科学省教育課程部会 教育課程企画特別部会の資料
「音楽，芸術（音楽）」の「ii）教育内容の改善・充実」
- 2) 小泉文夫著 「日本の音」 青土社 （1977年） pp. 237-302
- 3) 森脇憲三著 「授業の構造における専門的指導の内容と方法」全音楽譜出版社 （1975年） p. 13
- 4) 音楽之友社 「教育音楽(中学・高校版)」(2014年8月号)
- 5) 島崎篤子・加藤富美子 「授業のための日本の音楽・世界の音楽」音楽之友社 （1999年） pp. 39-40

参考文献

- 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 音楽編」 開隆堂出版 （2008年）